

総合科学の基礎C 哲学思想の基礎

2018/06/22

理解し考える力④

認識論と存在論①

前回の要点

- 余談: 教育は普通の人々が普通に幸せに生きてくための手段を提供する。
- 用語は概念の代理。
 - 学問は用語の体系。
- カントの認識論は、日常語で説明すると、
 - ①感覚する→②それがなんだか分かる(悟性)→③どうしてそうなるのか分かる(理性)。
- アリストテレスとカントの大きな違い
 - 存在論か認識論か。
- アリストテレスの
 - ロゴス=演繹的推論の手段。
 - ノース=帰納的な発見の手段。
 - 「理解する」という受動的な作用。→「作り出す理性」は？

学生のコメント: 帰納法

- 「帰納法では物事が本当に普遍かどうかかわからないが演繹法では普遍かどうかわかるということを学んだ」。
- ヒューム(1711-1776)による帰納法批判。
 - = 実験科学の限界。
- ポパー(1902-1994)の反証主義。
 - 「自然法則は現在のところ反証されていない仮説」

神

- 「なぜこの時代の人々は神が最高善なる存在だと信じていたのか疑問である」。
- 神の話はまだしていませんが...
- キリスト教哲学では、神の存在証明や神の属性の証明が盛んにおこなわれました。疑問があるなら、そのあたりのことを学んでみましょう。
- 西洋思想(自然科学を含む)の三本柱は、プラトン・アリストテレスとキリスト教です。「神なんて信じられない」と言っているのは、西洋文化を理解することはできません。

諸学に共通するもの

- 「学問にはそれぞれに固有のものといわれる前提が全てではなく、全部の学問に共通する前提も根本的に存在する」。
- アリストテレスは、論理学は共通だと考えた。
- ユークリッド幾何学の体系は、ユークリッド幾何学の公準と推論規則によって成立する。別の公準や推論規則がある体系は、別の体系。
- クーン(1922-1996)の「パラダイム」の思想につながる。

認識論と存在論

前回のまとめ

- 大きな転換点は、カントは「認識論」として議論しており、アリストテレスは「存在論」として議論している。
- 認識論
 - どうすれば認識(正しい知識)を得られるのか? そもそも得られるのか?
 - 通説: 存在論から認識論への転回=デカルト。
 - Epistemology=19世紀半ばに作られた言葉。
 - 哲学史(歴史)用語は、それが対象とする時代の人々に使われていたわけではないことに注意。

デカルト

- 従来の哲学(スコラ哲学＝アリストテレス研究)への不満。
- 「絶対に疑えない真理」をもとに、学問体系を作り直そうとする。
- 方法的懐疑:「わたしはある。:Je suis.」
 - 自分の身体や、世界があるということは、どうして証明されるのか?それらについて、どうやって知ることができるのか?
 - 独我論:実在するのは私の心だけ
 - 心身問題:心と身体はどうして相互作用できるのか。

心身問題の展開

- マルブランシュ:機会原因説occasionalism
 - 物理現象はきっかけoccasionで、感覚は神が起こす。
 - 意志はきっかけで、身体運動は神が起こす。
 - 普遍的な知識は神のうちにある。
- ライプニッツ:予定調和説pre-established harmony
 - 物理現象は因果関係で展開する。心の現象も因果関係で展開する。両者はそれぞれ独立に展開するが、時間的に一致するように調整されている。
 - 二つの時計がいつも同じ時間を指すようなもの。

・カント

- 物自体(Ding an sich: thing-in-itself)は、認識できない。
- 認識は、人間の側の理解枠組み。
- 人間の感覚や悟性(Verstand: understanding)はみな同じ。
- 認識は、人類普遍。

・20世紀以降の展開(文化相対主義)

- 19世紀:言語学や文化人類学の成立と発展
- サピア・ウォーフの仮説
 - 「世界は万華鏡のような印象の流れとして現前する。そうした流れは、われわれの心によって秩序づけられなければならない。ここで「われわれの心」というのは、主として、われわれの心の中の言語体系という意味である。われわれは自然を切り分け、概念へと秩序づけ、意味を書き込む...」

・20世紀以降の展開(普遍性への揺り返し)

- チョムスキーの普遍文法説
- バーリンとケイの『色彩基本語』
- エクマンの表情研究
 - など

今日の宿題

- いつもどおり、今日の授業コメント。
 - 締め切りは6月26日(火)17時。